

## 「神仏の慈悲」

『下千本』から出発した私は、有り難い神仏様の尊いお力添えに、ようやく気が付いた。自分自身との葛藤の末に、肉眼では見る事ができない御守護があることに…。

古山道を徒歩で行く私は、普通では考えられないスピードで、頂上に到着する事ができたのだから…。これもひとえに、御守護神様に手を引かれ、背中を押して頂いていたお陰様だろうと思っっている。

ついに『奥千本』に到着した私は、頂上の神社はどこだろう…？と、辺りを見回した。すると、『奥千本』前のバス停留所の正面、そこから見上げた坂の上に【金峰（きんぶ）神社】の鳥居が、悠々たる荘厳さで私を迎え入れてくれた。最後の急勾配（きゅうこうばい）の登り坂が、何よりも一番きつかった記憶がある。

肉体的には疲労困憊していたものの、しかし、目に見えない神仏様に背中を押して頂いて、ここまで連れてきてもらえたという「有り難い」

気持ちに満たされていた。その急勾配の坂を登り切ると、左手には社務所、右手に休憩所があり、小ぶりながらも物凄いオーラを発する「八咫鳥（やたがらす）」が迎えてくれた。そこで「じがとくぶつらい…南無妙法蓮華経」とここまで私を導いて下さったことに対する、感謝のお経を唱えさせてもらった。

社務所には鍵が掛かっており、誰もおられない様子。正面に目をやると、更に石積み階段が伸びており、見上げると、濃霧の中にもハッキリと神殿が目に見えび込んできた。神殿へ続くその階段を「南無妙法蓮華経」と唱えながら一歩一歩踏みしめて上がり、ついに目指してきた【金峰神社】の神殿へ到着した。

辺りは濃霧に覆われており、下界に目をやると、今登ってきた階段も霧に霞んで見えない。せいぜい三メートル先までは、何とか肉眼で確認できるという状況だった。そして「ゴオオオゴオオオオオー！」という唸り声のような音を鳴り響かせながら、強風が吹き付けてくる。階段下まで一気に吹き飛ばされそうになる勢いだ。自分の気持ちが緩んだ瞬間に、命でも持つていかれそ

うな雰囲気の中、気持ちを込めて灯す線香の束も、強風のために消されてしまつ。ようやく線香に火が点（とも）り、お香の煙がたちこめるも、強風にまた吹き消されてしまつ。点けては消え、消えては点けるといふ事を、何度も何度も繰り返しながら私は思った。

「お前の信仰心は、どれだけのものなのか？線香も献じないで引き返すくらいのものなら、お前の信仰心は形だけで、大したものではないな！」と…神仏様に試されているような気がしてきた。

「これは、神仏様がお試しになられているのかも知れない。ならば、私の祈りを受け取っていただけませんか、『人類の平和』を祈願させてもらうぞ！」と、強い信念を新たにしたら私は、『妙法蓮華経如来寿量品第十六。自我得仏来…速成就仏身。南無妙法蓮華経』。『妙法蓮華経如来寿量品第十六。自我得仏来…速成就仏身。南無妙法蓮華経』。と繰り返し繰り返し気持ちを込めて唱え続けた。

そんな繰り返しのお経も、どのくらい唱えたでしょうか？40分…50分…？自分の気持ちが無心 無私の状態へと移行していったでしょう。気が

が付いた時には、線香の束を三束全て献じていた。そしてあれだけの轟音を響かせていたのが夢か、幻だったかのように、静かな山風が変わっていた。手に握った線香の煙は、ユラリユラリと、空へ空へと真っ直ぐに伸びていった。

心の中は充実感に満たされていた。私は今まで味わったことのない感動に、唱えるお経の音が震えていた。歓喜のあまり、体も自然にブルブル震え出していた。言葉では何とも説明できないが、私の心の中には余計な思いはなく、ただ無心（無私）だった事だけは覚えている。

お経の中に【法悦（ほうえつ）】…仏様の教えに触れて溢れ出る、この上ない喜びという意味」という言葉がある。今考えると、私がこの時味わった感動は、まさに法悦と言えるだろう。それを考えると、かつてお釈迦様が菩提樹の下で、お悟りを開かれた時に、あまりの感激に心底震え上がられたそうだが、私がこの時感じた、何千何万倍の法悦を感じておられたのではないだろうか？…そんなことを一人想像しながら、吉野山を守護下さっている神仏様に合掌

した。

ここで感じた法悦は、1人の人間として、また僧侶として、私は一生忘れることはないだろう。この法悦は、お題目（南無妙法蓮華經）を信仰している私達なら、真摯に合掌して祈りを捧げるところには、必ず実感することができると確信した。その法悦こそ、何より最高の幸福なのではないかとさえ思ふ。

思うに法悦とは、自分のためではなく、他の人のために祈り、行動する中に芽生えさせてもらえる心境だろうと思ふ。他の人のためにという「利他（りた）」の精神は、まさに『法華經』の精神そのものだからだ。私達が信仰する『法華經』は、「仏様に成れる」「つまり、「成仏できる」教えだと言われている。またそれが為に昔から、厳しい教えともいわれているのである。なぜ厳しいかと言えば、現実逃避できない教えだからだ。

『法華經』は現実直視の教えなのだ。亡くなってから、西方極楽浄土に行く教えではない。亡くなってから天国に行く教えでもない。亡くなってから救われるなら、1日も早くお迎

えに来てもらえる方が幸福ということになる。だったら亡くなった方がましだろう。しかしそれでは、今のこの世はどうなるというのか？

「今」という尊い「今」をいかに生きるかで、未来の自分の生き方が決まってくる。ならば現在の「今」をどう生きればいいのか？ということが最重要課題となるのが普通だろう。

もう一度言おう、『法華經』は私達の生き方そのものを説かれた教えだ。つまり『法華經』は、『人生のハンドブック』と言えよう。人生とは、苦難の積み重ね。苦を知ること、はじめて楽を知る。つまり苦が先にあるということになる。感動するためには、感動を感じることができる行動（苦勞）が先に無ければ味わえない。愛を知るためには、愛を与えられる経験がなければ、その人が他の人に愛を与えることができない。病気をして健康の有り難みが分かるのも同じ事だ。つまり、苦も楽も共に有り難く受け止める心を育てる教えが『法華經』ということになる。苦も楽も共に受け止められる人間って、どんな人間なのでしょうね？こういう人を私達は「神様」「仏様」と呼ぶのでしょうかね。

次号へ続く…

合掌 副住職 谷川寛敬